

文学学術院における日本語研究の 10 年

——卒論・修論・博論を振り返る——

澤崎 文

1 はじめに

本稿は、2010～2019 年度の期間中に早稲田大学文学学術院へ提出された卒論・修論・博論の題目を対象として、この 10 年における文学学術院での日本語研究がどのようなものであったか振り返ることを目的としている。

実際には、「日本語学」が扱う範疇に関わる論文は文学学術院内のさまざまなゼミや研究室で執筆されていると思われる。しかしそのすべてを収集することが困難であり、また題目だけを見て日本語学の範疇に入るかどうかを判断することができないため、本稿では早稲田大学日本語学会に所属している教員の指導・主査によってなされた論文題目のみを対象とすることにした。その結果、文学部と文学研究科は日本語日本文学コース（第一文学部の日本文学専修も含む）の日本語学研究室、文化構想学部は複合文化論系の日本語学ゼミ（ゼミに所属しないで執筆する卒業研究も含む）における研究が対象となる。この対象範囲に漏れる日本語学関連の研究として主なものには、言語学や文学の研究室・ゼミで行なわれた、日本語を対象とする言語学的な研究や、文学作品中の日本語を対象とする研究があると思われる。

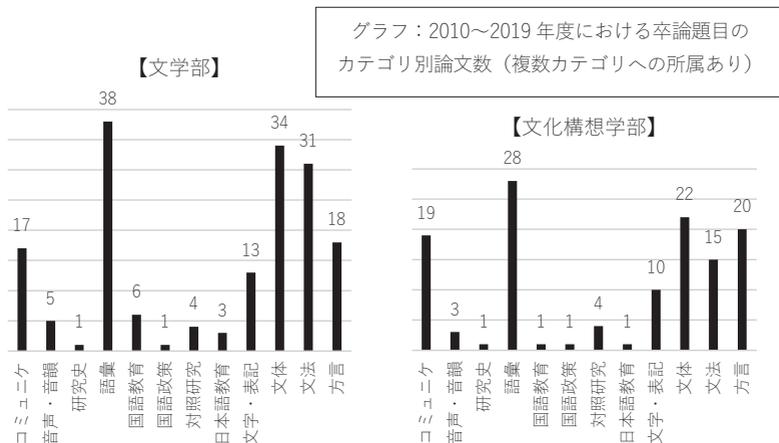
さらに、本稿の筆者は対象となる論文について、2019 年度のものの一部を除き直接に指導や審査に当たったわけではなく、個々の論文の題目のみを見てどのような研究かを判断したため、内容が具体的に分からない場合もあることをご了承いただきたい。当然ながら 10 年間の指導の実感に基づく意見や感想を言うこともできないが、あくまでも論文題目というデータに沿って大まかに傾向をつかむ試みであると考えていただければ幸いである。

本稿が扱った論文題目は、2014 年度以前の博論を除き、すべて『国文学研究』（早稲田大学国文学会）や『複合文化論系ゼミ論文・卒業研究概要集』（早稲田大学文化構想学部複合文化論系）、複合文化論系 HP の論系概要 (<http://www.fukugo-waseda.jp/aboutus/> 2021/1/5 現在) にて確認することができる。なお、文化構想学部で書かれた論文は正式には「ゼミ論文」「卒業研究」と呼ばれているが、ここではそれら呼び分けず、文化構想学部の「卒業論文（卒論）」と称する。

2 卒業論文

卒論は大きく文学部（以下「文」）と文化構想学部（以下「文構」）に分け、各学部の学生による関心の傾向を比較しつつ、その 10 年間における変化を確認したい。当該期間中、文には 140 本、文構には 95 本の卒論が対象として見いだされた。

まず、対象となる論文題目を各カテゴリに分類する。カテゴリ分けについては、国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」(<https://bibdb.ninjal.ac.jp/bunken/ja/> 閲覧日 2021/1/5) における分類を参考にしつつ、「音声・音韻、研究史、語彙、国語教育、国語政策、コミュニケーション、対照研究、日本語教育、文体、文法、方言、文字・表記」の 12 種類を認定した。当然、複数のカテゴリに関わる研究がありうる（たとえば「方言」かつ「文法」など）ので、一本の論文につき最低でも 1 種類、最大で 3 種類のカテゴリを認定している。ただし、繰り返すが本稿は論文題目からのみ得た情報で振り分けているため、アプローチ方法が不明の題目もある。あくまでもだいたいの傾向をつかむための目安と考えてもらいたい。そのうえで、学部別に各カテゴリに所属する論文数をグラフにしたものを以下に示す。



なお、談話、待遇表現、役割語は「コミュニケーション」カテゴリに入れた。「文体」カテゴリは文章表現全体を対象とするものやレトリック的なものを入れたつもりだが、「文章の特徴」とのみ称する題目などは何でも入ってしまうので、差し引いて考えた方がいいかもしれない。

グラフから両学部を比較すると、全体に対して文は文法、文構は方言の割合が高いことに気づく。所属教員（文は特に森山卓郎先生、文構は上野和昭先生）の専門性や卒論以前の演習・ゼミなどで扱う内容が直接的に卒論題目へ反映していると言えるであろう。その一方で、文・文構ともに語彙、文体に関する論文題目が多くあるなど、全体として学生が卒論題目に選ぶカテゴリの傾向は文・文構ともに大きく異なることがわかる。10年間におけるカテゴリの分布にも、変化の傾向と言えるものが見いだせなかった。両学部によく見られるものは、文学学術院の学部学生が対象期間を通して常に興味を持ち、卒論として取り組みやすいテーマにつながるカテゴリであると考えられる。

研究対象とする資料についてまず両学部を比較して述べると、文構ではファッション雑誌を扱うものが目立ち（5件）、大学生を対象として若者言葉に焦点を当てた研究も多かった（10件）。これは文化構想学部・複合文化論系という多様な分野を横断的に学ぶ環境の中で、日本語に対し社会言語学的な興味を持つ学生が多いことを反映しているのではないだろうか。関連して、文構の上記グラフにおいては、全体数に対するコミュニケーションの率が高いことも指摘できる。文は広告（8件）や歌詞（6件）が目についたが、全体としてどのような資料を対象とした研究であるかを題目に明示しないものが多かった。

研究対象として両学部ともに多かった資料は、小説や詩歌などの文学作品（文18、文構14）であり、マンガやアニメ、ドラマなどのサブカルチャーを対象とするものは意外にも多くはなかった（文4、文構4、これを意外と思うのは筆者だけであろうか。）一方で、SNSやインターネット、メールなどの電子メディアを対象とした研究がサブカルチャーに本数で迫っていた（文5、文構2）。SNSの日本語研究は、この10年での新たな傾向であろう。

その他、卒論テーマとしては、文・文構ともに関心が高かったものに待遇表現（文13、文構6）とジェンダー（文7、文構3）が挙げられる。また、文構はオノマトペ（5件）が目立っていた。

カテゴリやテーマに年度ごとの特徴は見いだせなかったが、10年間の中で変化として捉えられることが一点だけあった。両学部とも、日本語史的な観点をもった卒論が減少傾向にあるということである。表1に、卒論題目が対象とする時代を卒論提出年度ごとに示す。題目だけではどの年代を扱うかわからないものもあったがそれらは除いて示したため、この表もやはり大まかな傾向をつかむためのものと理解されたい。また、表中の「変遷」はどの時代を扱うか不明なものを含め、短い期間や現代であっても変化・変遷を扱うものをここに入れた。

表を見ると、10年間の前半は前近代や戦前の日本語を扱ったり、変遷に注目したりする内容がそれなりにあったが、後半は現代語を扱うものの割合がかなり高くなっている。近世以前では近世を対象とするものが多く、次いで中古、中世が見られた。また、近代（戦前）を対象とする研究は文に多く、文構は現代日本語

を対象としつつその中での変遷・変化を見る観点のものが多くあった。

表1：2010～2019年度における卒論題目の対象時代別表（対象時代が不明のものは除く）

年度	【文学部】										【文化構想学部】								年度
	中古	中世	近世	近世近代	前近代	近代	近現代	変遷	現代	計	中古	中世	中近世	近世	近代	変遷	現代	計	
2010	1							1	5	7	1			1			6	8	2010
2011			2	1		5			3	11		2			2	1	5	10	2011
2012	1	1							6	8	1				1	3	3	8	2012
2013						3			10	13						1	4	5	2013
2014			1		1				7	9							11	11	2014
2015						1			11	12					1	7	8	2015	
2016						1			11	12		1			1	9	11	2016	
2017						2	1		20	23					2	7	9	2017	
2018									11	11					1	12	13	2018	
2019			1						18	19						6	6	2019	
計	2	1	4	1	1	12	1	1	102	125	2	2	1	1	3	10	70	89	計

3 修士論文

当該の期間において、文学研究科日本語日本文学コースで書かれた日本語学に関する修論は23本であった。卒論と同様の方法により、論文題目が対象とするカテゴリと時代を確認したところ、表2のような結果となった。

カテゴリはやはり語彙と文体が多くなっており、コミュニケーションや文字・表記、文法、方言がそれに続くところは卒論と同様の傾向である。一方で卒論とは違い、音声・音韻や対照研究が他カテゴリと同等数見られることも指摘できる。特に対照研究はすべて留学生の取り組みによるものであり、文学研究科に留学生が少なからず進学し、日本語研究の一角を形成していることを意味するであろう。

対象とする時代は近年の卒論の傾向とは異なり、近代以前を扱ったり変遷を見ようとしたりするものが半数に及んだ。修論の特徴とすることができそうだが、卒論における日本語史研究の減少傾向をふまえると、今後は修論においても現代の共時的な言語事象を対象とした研究が増えていく可能性がある。

表2：2010～2019年度における修士論文の
カテゴリ・対象時代別表

カテゴリ	論文	時代	論文
コミュニケーション	4	近世	1
音声・音韻	4	近代	5
語彙	7	変遷	3
対照研究	3	現代	9
文字・表記	3		
文体	6		
文法	3		
方言	3		

4 博士論文

当該の期間において、文学研究科日本語日本文学コースで書かれた日本語学に関する博論は 12 本であった。この 12 本についてカテゴリや対象時代を云々することに意味があるとは思えないため、ここでは直接にすべての論文題目を示す。

*印は論文博士に該当するものである。

- | | |
|---------|--|
| 2012 年度 | *現代共通日本語における待遇コミュニケーションに関する研究 |
| 2014 年度 | ・明代中国資料による室町時代の音韻についての研究
—『日本国考略』を中心に—
*現代日本漢語の意味・用法と造語機能に関する研究 |
| 2015 年度 | *漢語アクセントの史的形成についての研究
・上代日本語における仮名表記の研究 |
| 2016 年度 | ・近世・近代における程度副詞・強意副詞の研究
*日本書紀声点本の研究
*江戸語資料としての後期咄本の研究
・京阪式アクセント地域におけるアクセント変化の研究
・思考動詞による文末表現の史的研究 |
| 2017 年度 | ・近代活版印刷における平仮名字体の研究 |
| 2018 年度 | ・現代日本語におけるカタカナ使用の実態 |

2014 年度は文学学術院において初めて日本語研究による課程博士が出た年であり、その後毎年のように学位取得者が続いている。博士論文についてはその意味で重要な 10 年間であったと言える。

5 おわりに

以上の通り、羅列的にはあったが 10 年間の卒論・修論・博論をデータに則して振り返ってきた。大学院全体への進学者が減少傾向にある昨今だが、幸いにして今回対象とした期間ではこれら論文数の減少傾向は見られなかった。

2010～2019 年度は、第一文学部・第二文学部から文学部・文化構想学部の体制となって卒業生を出した最初の 10 年間にあたる。草創期を終えた新文学学術院の日本語研究が今後どのように発展するか、これからの 10 年を注視しつつ、ともに学んでゆきたい。

—さわざき ふみ 文学学術院・専任講師—